

はじめに

「こうして小網代は残されることになった」と書いたのは十年前、第一詩集のあとがきだった。ゴルフ場開発とリゾートマンション建設の難を逃れることができれば、小網代は平和な自然地帯になると信じていたのだが、岸先生は違った。「これから、この一帯を管理運営していく枠組みを作らなければ、本当の保全はありえない」

それから小網代をめぐる人々の動きは、一層グローバルに活発になっていった。いるか丘陵のあちこちの市民団体からいるかのしっぽを目指してたくさんの方が集まってきた。NPO法人が設立され、いくつもの企業から助成金をいただき、学校をはじめとする多くの団体の案内を組織的にできるようになった昨年、「小網代の保全が実現されました」との発表があつて森は閉ざされてしまった、一時的にはあるが。

「これから小網代は変わりますよ」との岸先生の予言を受けて、これまでの小網代を残しておきたいと思つた。荒削りな小網代、優しく包み込んでくれる小網代、ぞつと鳥肌がたつような小網代、あけっぴろげな小網代。どれもこの二十年の間私たちが何度となく顔を合わせてきた小網代だ。新しい公園として完成すれば、きれいに整備されてどこもかしこもよそ行きの顔になってしまいかも、そんな声には出さない心配を共有してくれる守る会の仲間が、今回も手を貸してくれ素敵な絵を描いてくれた。ここに収めたのは、保全への道を試行錯誤してきた人間たちの苦労も知らず、の

びのびと過ごしてきた幸せな森の姿だ。そしてそんな森に通いながら、やはり幸せだった私たちの思い。そう、ありのままの小網代に巡り合えて、私たちは本当に幸せだった。